

しんぱん
しどうようもんしゆう
新版 指導要文集

だいさんしゆう

しゆくめいてんかん

第三章 宿命転換

さんぜ せいめい

三世の生命

かくのごとく巧みに立つといえども、いまだ過去・未来を
いちぶん 知 げん くる 幽なり、かるがゆえに玄と
一分もしらず。玄とは黒なり、幽なり、かるがゆえに玄と
げんざい 似 げんざい じん
いう。ただ現在ばかりしれるにいたり。現在において仁・
ぎ せい み 守 くに やす
義を制して、身をまぼり、国を安んず。これに相違すれば
やから 亡 いえ ほろ とう けんせい ひとびと
族をほろぼし家を亡ぼす等いう。これらの賢聖の人々
せいじん かこ ぼんぷ せ
は、聖人なりといえども、過去をしらざること凡夫の背を
見 miraい 鑑 もうじん まえ
みず、未来をかがみざること盲人の前をみざることがとし。

(005 開目抄
かいもくしやう)

さんぜ せいめい
三世の生命51ページー3行)

みようらくだいしい

ぶつきよう

るけ じつ

よ

れいがくさき

妙楽大師云わく「仏教の流化、実にここに頼る。礼楽前

は

しんどうのち

ひら

とううんぬん

に駆せて、真道後に啓く」等云々。

てんだい

こんこうみようきよう

い

いつさいせけん

天台云わく「金光明経に云わく『一切世間のあらゆる

ぜんろん

みな

きよう

よ

ふか

せほう

し

すなわ

善論は、皆この経に因る。もし深く世法を識らば、即ち

ぶつぼう

とううんぬん

しかん

い

われ

さんせい

つか

これ仏法なり』と』等云々。止観に云わく「我、三聖を遣

か

しんたん

け

とううんぬん

ぐけつ

い

わして、彼の真丹を化す』等云々。弘決に云わく

しょうじようほうぎきようきよう

い

がっこうぼさつ

がんかい

「清浄法行経に云わく『月光菩薩は、かしこに顔回と

しょう

こうじようぼさつ

ちゆうじ

しょう

かしようぼさつ

称し、光浄菩薩は、かしこに仲尼と称し、迦葉菩薩

ろうし

しょう

てんじく

しんたん

さ

は、かしこに老子と称す』。天竺よりこの震旦を指して、

かしことなす」

かいもくしよ

005 開目抄

さんぜ せいめい

三世の生命51ページー5行

みようらくだいし

ぶつきよう るふ

じゆきよう ちから

い

妙楽大師は「仏教の流布はじつに儒教の力をそのまま生か

じゆきよう

れいがく

れいぎとう

せいかつきはん

さき

るふ

したのである。儒教の礼楽（礼儀等の生活規範）が先に流布され

まこと みち

ぶつぼう

あと

ぐつう

て真の道である仏法が後に弘通されたのである」といっていま

ちゆうりやく

おな

みようらくだいし

しかんぶぎようでんぐけつ

す。（中略）また同じ妙楽大師の止観輔行伝弘決には

しようじようほうぎよきよ

がっこうぼさつ

ちゆうごく

う

がんかい

「清浄法行経にいわく、月光菩薩は中国に生まれて顔回と

こうじようぼさつ

おな

こうし

かしようぼさつ

おな

ろうし

いい、光浄菩薩は同じく孔子といい、迦葉菩薩は同じく老子とい

つた。これらはすべてしやくそん 釈尊つかの使いとして、ぶつきよう 仏教せんくの先駆としておし 教え
を説いたものである」とあります。

われ いっさいしゆじょう
我ら一切衆生、
ろうぎぶんぼうとう
螻蛄蚊虻等に至るまで、
いた
みな無始無終の
むしむしゆう
色心しきしんなり。

(
053 諸宗問答抄

しよしゆうもんどうしやう

さんぜ
三世の生命
せいめい
775 ページ 3 行

自身じしん法性ほつしょうの大地だいちを、生死しょうじ生死しょうじと転めぐり行いくなり

（095 御義口伝おんぎくでん）

三世さんぜの生命せいめい
1010 ページー15行

「已」^いとは、過去^{かこ}なり。「来」^{らい}とは、未来^{みらい}なり。「已来」^{いらい}の

ことば^{ことば} なか^{なか} げんざい^{げんざい} あ
言の中に現在^あは有るなり。

(095 御義口伝^{おんぎくでん})

さんぜ^{さんぜ} せいめい^{せいめい}
三世の生命 1049 ページ 17 行

がじつじょうぶついらい^{がじつじょうぶついらい} い^い かこ^{かこ}
我実成仏已来の已とは過去のことであり、来^{らい}とは未来^{みらい}のことで

いらい^{いらい} ことば^{ことば} げんざい^{げんざい}
す。この已来^{いらい}という言葉のなかに現在^{げんざい}はふくまれるのです。

さんがいしそ

しょうろうびようし

ほんぬ しょうじ

「三界之相」とは、生老病死なり。本有の生死とみれ

む しょうじ

しょうじな

たいしゆつ

な

ば、「無有生死」なり。生死無ければ、退出も無し。ただ

しょうじな

しょうじ

み

えんり

まよ

生死無きのみにあらざるなり。生死を見て厭離するを、迷

い しかく い

ほんぬ

しょうじ

ちけん

いと云い、始覚と云うなり。さて、本有の生死と知見する

さと

い

ほんがく

い

いま

にちれんとう

たぐ

を、悟りと云い、本覚と云うなり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

とき

ほんぬ

しょうじ

ほんぬ

南無妙法蓮華経と唱え奉る時、本有の生死、本有の

たいしゆつ

かいかく

退出と開覚するなり。

(095 御義口伝

おんぎくでん

さんぜ

せいめい

三世の生命

1050

ページー10行)

095 御義口伝

おんぎくでん

三世の生命 1050 ページ 14 行

（「生死の、若しは退、若しは出有ること無く」の）無も有も、生

も死も、若退も若出も、また在世も滅後もすべて遠い過去世よ

りつねに生命そのものにそなわる本来の姿、働きののです。また

無有生死の“無”とは、宇宙のあらゆる森羅万象がすべて

妙法蓮華経の振る舞い以外の何ものでもないということであり、”

有“とは、地獄は地獄のありのままということであり、もともと十界

をそなえていること自体が妙法なのです。”生“とは、永遠に

じょうじゅう

みょうほう

こんてい

せい

しょう

常住する妙法を根底とした生ですから、いまはじめて生じた

ものではなく、もともとあるものが縁えんにふれてあらわれたものです。”

し えいえん せいめい

し

だいうちゅう

じたい

死“とは、永遠の生命からみた死ですから、大宇宙それ自体とな

ほうかい

みょうほう

じたい

も

たい

り、法界がそのまま妙法それ自体なのです。それは「若しは退」の

めつご

し

も

しゅつ

ざいせ

せい

ゆえに滅後すなわち死となり、「若しは出」のゆえに在世すなわち生

しりぞ

しゅつげん

ちが

となるのであって、退くか出現するかの違いにすぎません。

凡夫ぼんぷの血肉けつにくの色しきしん心を本有ほんぬと談だんずるが故ゆえに、本門ほんもんとは云いうな
り。

(095 御義口伝おんぎくでん)

三世さんぜの生命せいめい
1113 ページ 14 行

げんぜ い 置 ことば たが
現世に云いおく言の違わざらんをもつて、
なすべからず。 後生の疑いを
ごしよう うたが

(
122 さどごしよ
佐渡御書

さんぜ せいめい
三世の生命
1286 ページー13行

ねはんぎよう

ふぼ

きようだい

さいし

けんぞく

別

なが

涅槃経には、父母・兄弟・妻子・眷属にわかれて流すと

なみだ

しだいかい

みず

多

ぶつぼう

ころの涙は四大海の水よりもおおしといえども、仏法の

いつてき

溢

み

ほけきよう

ぎようじゃ

ためには一滴をもこぼさずと見えたり。法華経の行者と

かこ

しゆくじゆう

おな

そうもく

ほとけ

なることは過去の宿習なり。同じ草木なれども仏と

作

しゆくえん

ほとけ

ごんぶつ

つくらるるは宿縁なるべし。仏なりとも権仏となるは、

しゆくえん

また宿業なるべし。

(280) 諸法実相抄

しよほうじつそうしよ

さんぜ

せいめい

三世の生命

1792

ページー13行